

ST 氏邸訪問記(2017.1.30)

1. はじめに

A 氏邸を辞してから、Y 氏の車に便乗させていただき、初めて何う ST 氏邸に向かいましたが、どのようなシステムか興味津々で、M 氏、A 氏、Y 氏とともにどのような結果になるか、期待を膨らませていました。

事前に ST 氏からの希望も伺っており、初めてのシステムでどのようなことができるか、持参したものをどのように適合させることができるか、ぶっつけ本番のテストとなりました。

2. ST 氏邸第一システムでの試聴の経過



入力系は Lux CD プレイヤー-D-N100 と 2 階から LAN ケーブルで引っ張ってきている Technicis ミュージックサーバー-ST-G30、Technicis ネットワークプレーヤー-ST-C700 および自作の金田式ディスクリット DAC などです。

スピーカーシステムは 2A3/300B コンパチ自作アンプ (ラック内に隠れている) 駆動のマーチンローガン SL3 と Technicis インテグレートッドアンプ SU-C700 駆動の Technicis スピーカーシステム SB-C700 の 2 系統です。

最初に、96KHz24bit のハイレゾや持参した DSD 音源の入った USB メモリーを ST-C700 に挿しこんで聴かせていただきましたが、SL3 は非常に軽やかで爽やかな音がしましたし、SB-C700 は ST 氏によれば音が固いということでしたが、少し低域が不足しているものの同軸の良さがでていたように思います。

まずは、コンデンサースピーカーの SL3 の電源ケーブルをリベラメンテに替えてみたいということでやってみると、若干軽めの SL3 の音に落ち着きと音の明瞭さが出てきました。それではと、アンプの電源タップに M 氏持参のアモルメットを付加した AET の電源ケーブルをつなぐと、SL3 も SB-C700 も広がり感や響きの豊かさが加わってきました。さらに M 氏自作のアモルメット組み込みの電源ケーブルの効果を CD プレイヤーで確認しましたが、これも AET の電源ケーブルと同じ方向の効果があり、アモルメットの効果は M 氏邸や拙宅と同様、間違いないものということになりました。なお、アンプの電源タップのアモルメットを付加した AET の電源ケーブルからパワーリベラメンテに替えるとやはりリベラメンテの音になりました。

次にアリエナイザーの効果をスピーカースタンドの上に敷いて、その上に SB-C700 を載せてみたところ、SB-C700 の固さが取れ、バイオリンのソロの CD では音の粒立ちも良く音が滑らかになりましたが、M 氏持参のワーグナーの CD では、低域の迫力や広がり感が減るようなところもあるという声もでました。

さらに他のリベラメンテケーブルはどうかということで、デジタルリベラメンテを CD プレイヤーからプリメインアンプの入力に使ってみたところ、やはり音が滑らかになる傾向が見られました。

SB-C700 でのアリエナイザーの効果には種々意見がでましたので、SB-C700 のスピーカースタンドを触ってみたところ、ぐらつきがあり、演奏中も支柱が振動していることが分かりましたので、スピーカースタンドの上のアリエナイザーを外してスピーカースタンドの下に敷いてみたところ、こちらの方が効果が大きく、ワーグナーの CD では、低域のクオリティもよくなった印象でした。

以上、結果的に、いろいろとやった結果、SB-C700 も SL-3 も随分変わったように感じました。

第一システムの結論としては、ST 氏は自作をなさるのでアモルメットを電源ケーブルその他に応用してみることも、インフラノイズのケーブルを種々検討してみることもという結論になりました。アリエナイザーをスピーカースタンドの下に敷くことは、今回初めて実施したのですが、まだまだ、個別の環境の振動モードに合わせて、使い方を探ってみる必要があることがわかりました。

3. ST 氏邸第二システムでの試聴の経過

入力系は Technicis ミュージックサーバー ST-G30、CD プレイヤー DCD-S10III、自作金田式真空管 DAC、アナログプレーヤー Technics SL-1600 などです。

プリアンプの LUX CL-38 からチャンネルデバイダーのベリンガー DCX2496 で分けて 3 チャンネルで駆動するマルチアンプシステムです。

中高域は金田式直結 845 シングルアンプ (211 差し替え可能) で JBL 2405 ツイーターと JBL 1inch Driver 2426J のウッドホーンを駆動、中低域はアキュフェーズ

A-20でJBL 25cm ミッドバスユニット LE10を駆動、低域はNu-Foceのデジタルアンプ STA-120でJBL 36cm 2436ユニットを駆動しています。驚いたことにDriverのホワイトオーク製のウッドホーンとミッドバスと低域のキャビネットはアフリカウガンダハードウッド製で材質、仕上げともたいそう凝った自作品です。



M氏持参のアナログやCDを聴かせていただきましたが、自作管球アンプ、市販アンプ、デジタルアンプの混成ながら音の繋がりに違和感がありません。M氏からバランス的に少し低域のレベルが高いという指摘がありましたが、2階の床の問題からか、床鳴りが被ってくるように感じましたので、このあたりの改善が課題のように思いました。

M氏邸のシステムも、拙宅のJBL4350Aもマルチアンプシステムですが、ST氏はカットオフは急峻な減衰、M氏邸ではマイナス6dB/Octの減衰、拙宅マイナス12dB/Octの減衰で、この辺の考え方はそれぞれに理由がありそうです。

4. その他

ネットワークのアプリはTechnicisのMusic Appを使用されており、汎用性があるということなので、現在KinskyとLuminアプリを使っているのを参考にさせていただきます。また、iPhoneでF特が測定できるRTA Liteをお使いで、実際に1階のスピーカーの特性を見せていただきましたので、これも参考にしたいと思っています。

AVシステムも3システムあり、いずれも専用の小型スピーカーやサラウンドもあって映像ともども大型の画面で楽しまれています。

【註】

その後、ST氏からのメールでは、SB-C700のスピーカースタンドを剛性の高いものに替えたところ、随分と低域の改善が見られたとのこと。また、アモルメットの

組み込みやインフラノイズから借用したケーブルの評価、ならびに2階のシステムの床振動対策など、鋭意検討中とのことですので、次回の訪問が楽しみです。

以上